

人 と 名

鷗外の歴史小説と史伝における人名について

PEOPLE AND NAMES

One aspect of MORI Ōgai's historical literature

Emmanuel LOZERAND*

MORI Ōgai's historical novels and chronicles place emphasis on names, particularly people's names.

This paper examines different attitudes toward the names of characters in his works. For example, some characters place great importance on their names while others keep their distance, even to the point of abandoning them. Still other characters intentionally manipulate their names, search for names or play games with their names.

These paper analyses the literary function of people's names in Ōgai's works, noting that one criterium for distinguishing between the author's novels and chronicles is in the different way he treats names. MORI Ōgai also emphasizes the significant role that names play in genealogies, lists and other places where group of names

*エマニュエル・ロズラン 早稲田大学大学院研修生、フランス国立東洋言語文化研究所博士課程在学。論文に、「SHIBUE *Chusai* de MORI Ōgai — De l'érudition (森鷗外の『渋江抽斎』— 考証について)」などがある。

are found. Names are also linked with such rhetorical figures as “fukusen” and “kurinobe”. Clearly, the choice of one or more appellations among the several names that people were given before the Meiji Restoration is a key to understanding Ōgai’s work.

Focusing on several works = *SAHASHI Jingorō, Gojiingahara no katakiuchi, Sanshō dayū, GYO Genki, Kanzan Jittoku, and SHIBUE Chūsai* = I will endeavor to explain the relevance and importance of this neglected dimension of MORI Ōgai’s historical literature.

鷗外の史伝には思いがけない邂逅の魅力がある。例えば龐大な『伊沢蘭軒』の「その三百二十五」には「ノン、ド、カレツス」というフランス語が出てくる。文脈から明らかなように、この言葉は「愛称」をさすわけである。しかしフランス人の私にとって、こうした作品の中にこういう表現を見つけたことは、なかなか不思議な経験であった。なぜなら、この「ノン、ド、カレツス」(nom de caresse) という表現は、現在フランスでは使われておらず、私にとって未知の母国語との出会いだったからである。調べてみると、この言葉は、普通の辞書には出てこない、十七世紀の言葉なのである。鷗外がどのようにこの言葉を知ったのか、明らかではないが、どうして彼がこれに留意したかということには、多分答えられる。「ノン、ド、カレツス」とは愛称を意味するが、文字通り「愛撫のような名前」なのである。「撫名」(撫でる名) ^{フメイ} といってよいかもかもしれない。鷗外はこの言葉の文字通りの意味を味わったのだろう。いずれにせよ私は、今では忘れられてしまった母国語の素晴らしい表現に新たな生命を吹き込んだ鷗外に心から感謝している。

ところで、こうした表現を、それ自体は珍しいが大した意味もない些事に過ぎない、と考えてはいけない。こんなところにも、鷗外がいかに人の名に愛着を示したかということが明瞭に現れているからである。この愛着はとりわけ史

伝と歴史小説において顕著であるから、ここではこれらの作品に話を絞りながら、まず主人公が名前に対してどんな態度を取るか、という問題に少し触れていきたいと思う。

第一章 名に対する人物の振る舞い

史伝と歴史小説には、名を全く気にしないというような人物は殆どいない。言ってみれば、鷗外の歴史文学はおよそすべて人と名の話である。それらの主人公たちを分類してみると、大まかに五つの典型が浮かび上がる。

(1) 名を大切にする人

鷗外はまず「名聞^{ミヨウモン}」への配慮という武士の倫理の重要な側面を強調する。例えば、興津弥五右衛門は「根性は元の武士なれば、死後の名聞の儀尤大切に存じ、此遺書相認置候事に候」(XXXVIII, 497 注①、下線引用者、以下同様)とはっきりと主張する。それ故に、武士を登場させる鷗外の作品は、しばしば人物が功名を得たり、汚名を避けたりして、立派な家名を伝えようとする行動を背景に発展している。逆説的なことに、こういう態度の最もいい例は、『栗山大膳』における名前を棄てる人物が示している。「栗山の名は人に故主の罪を思はせるからと云つて、利章がわざと外威の苗字を冒させた」(XV, 650)。栗山大膳利章は武士であるから、それは気高い行為なのだとは言えまいか。ともかく、ある人物がいかに名前を重んじるかということは、『渋江抽斎』における山内仲平の言葉で明らかになる。

「姓名だの紋章だのは、先祖から承けて子孫に伝える大切なものである。

濫に匿したり、更めたりすべきものでは無い。」(XVI, 328)

名前をこれほどまでに大切にせる人物にとって、最も耐えがたいことは、無論、汚名を被ることである。したがって、研究者がよく言うように、「冤を雪ごうとする」努力が鷗外の歴史文学の重要なモチーフとなっていることは、当然である。この「雪冤^{セツエン}」を扱った代表的な作品は恐らく『津下四郎左衛門』である。その冒頭は次のように始まっている。

津下四郎左衛門は私の父である。(私とは誰かと云ふことは下に見えてゐる。)しかし其名は只聞く人の耳に空虚なる固有名詞として響くのみであらう。(略)

「津下四郎左衛門は横井平四郎の首を取つた男である。」(略)

私は(略)窮めて父の冤を雪ぎたいのである。(XVI, 29)

考えてみると、この「私」の態度は曖昧であり、この文章もなかなか解釈しにくいのである。「空虚なる固有名詞」に新たな生命を与えるという行為は、この場合同時に過去の汚名を蘇らせることになる。いわゆる「ダブル・バインド」的な状況である。息子の「私」は家名を持ってない。家名を回復しようとするれば、汚名もまた新たにされる。したがって、「窮めて父の冤を雪ぎたい」という言葉の裏に、「私は名前が欲しい」という声を聞かなければならない。それに、差別問題に触れている『鈴木籐吉郎』にも設定が似ており、雪冤のモチーフは結局二次的なものになっている。それ故に、単に「雪冤」の重要性を強調するばかりでなく、それを、名前に対する様々な態度という大きな枠組みの中で考察した方がよいのではないかと思われる。

名前を気に掛けるということは他の様々な行為を通して現れてくる。登場人物は、自分の名前を使い、自分の生命を賭けることもある。例えば署名というのは、『護持院原の敵討』などで大きな役割を果たしている。父三右衛門が殺されてしまった後、その家族は仇討ちの準備をするために集まり、評議をする。娘りよは署名の重要性を深く理解していた。「りよは始終黙つて人の話を聞いてゐたが、願書に自分の名を書き入れて貰ふことは、きつと居直つて要求した」(XIV, 409)。それで、しばらくしてからりよは弟宇平と叔父九郎右衛門とともに、「三人に宛てた、大目付連署の証文」(XIV, 414)をもらい、敵討ちを許される。りよの決然とした行為が署名で始まったのは注目に値する。

名を重んじるということは武士の倫理ばかりに限らない。鷗外は、作家と名声のつながりについてもしばしば考えていた。例えば、『伊沢蘭軒』では頼山陽の野心が描かれている。「山陽は能く初志を遂げ、文名身後に伝はり、天下

其名を識らざるなきに至つた」(XVII, 37)。しかしこの名声への欲望が最も明瞭に浮かび上がるのは、『魚玄機』においてなのである。この小説は中国唐時代の女流詩人を登場させ、あまり重視されていない作品であるが、名声と噂の相互関係を扱った作品と言える。若い魚玄機は噂を聞くことにより、有名な詩人温オンに興味を持つようになり、自らも巧みに詩を作るようになる。「それと同時に、詩名を求める念が漸く増長した」(XVI, 109)。魚玄機も自分の志を遂げ、「詩名が次第に高くなつた」。こうして得た名声は愛人陳チンとの出会いなどのように、幸福も招くが、結局魚玄機の不幸の原因でもある。冒頭からすでに不吉な噂が響いていたのだ。

魚玄機が人を殺して獄に下つた。風説は忽ち長安人士の間に流傳せられて、一人として事の意表に出でたのに驚かぬものはなかつた。(XVI, 103) 魚玄機は嫉妬で人を殺したが、死刑になったのは、有名人になろうとした彼女が、有名になると同時に噂の的にもなったからである。

京兆の尹(裁判者、注：引用者)は、事が余にあらはになつたので、法を枉げることが出来なくなつた。立秋の頃に至つて、遂に懿宗に上奏して、玄機を斬に処した。(XVI, 117)

鷗外は名声と噂という不可避的な因果関係を強く意識していたし、限界状況において噂が果たす残酷な役割を、何度も強調した。しかし、ここまでわずかの例を通じて現れた「名は体を表す」という態度と意識の対局に、「名を捨てて実を取る」という姿勢がある。

(2) 名前から離れた人物

名を重んじて、時には、自分の名前との間に距離を置いた人がいる。距離を置くには、自分の意志による場合もあり、そうでない場合もある。

a. 名を避ける人

名声と噂を中心にする『魚玄機』には面白いエピソードがある。

宣宗は(皇帝、注：引用者) 微行をする癖があつて、温の名を識つてから間もなく、旗亭で温に邂逅した。温は帝の顔を識らぬので、暫く語を交

へてゐるうちに、傲慢無礼の言をなした。(XVI, 107)

なかなかアイロニーめいた話である。「詩名は愈高く」なった温は、「微行」を好む皇帝に騙されている。名声に憧れる人と違い、名声を超越している皇帝はかえって「微行」、つまり匿名の優れた点を理解し、味わうことができるのである。それに対して、匿名を強いられている人もいる。大塩平八郎は息子とともに逃亡者となり、頭を剃られてしまうが、大阪に帰り、商人の家に入る。大塩親子だと分かったこの商人は「や、大塩様ではございませんか」と声を掛けると、平八郎は「名なんぞを言ふな」と、「叱るやうに云つた」(XV, 51)のだ。平八郎は必ず名前を匿そう、というよりも、『鷗外漁史とは誰ぞ』の表現を借りれば、「名を避け」ようとする。一ヶ月の間大阪の商人の離れに籠もり、匿名の隠れ蓑の下に安全な生活を送った平八郎だが、同心から発見され、「平八郎卓怯」(XV, 54)と呼びかけられる。自分の名前が再び公に響く時、彼は死に直面することになったのだ。

b. 名前を剥奪される人

『山椒大夫』における匿名の扱いはさらに興味深い。主人公たちは名前を剥奪されていても、本当の名前を失ってはいないのである。山椒大夫は二人の子供を奴隷として買った後、彼らに名を付ける。

大夫は嘲笑つた。「愚者と見える。名はわしが付けて遣る。姉はいたつきを垣衣、弟は我名を萱草ぢや。」(XV, 666)

子供たちは自分の名前を剥奪されたばかりか、意地悪い名前を付けられた。しかしこの不幸は幸福でもあり、この失敗は成功でもある。子供たちがこれらの残酷な馬鹿馬鹿しい名前を付けられたのは、自分たちの反抗の結果である。彼らは、「外の奴」と違い、「名告もせ」ず、愚か者を装い、匿名を守る。そうすることによって、厨子王と安寿は、両親からもらった名前を密かに、大切にしているのである。後に、厨子王は逃げだし、都に行き、関白師実^{せみ}に認められ、父正氏の後を継ぎ、正道と名乗るが、この「正道」という名前は、社会的な意義はあっても、ある意味では、全く役に立たない名前にすぎない。なぜなら、

厨子王の母親、すなわち「ノン、ド、カレツス」とはなんの関係もない名前であるからだ。逆に、厨子王という幼名こそが息子と母親が再会するための不可欠な鍵なのである。まず息子は襦袢を着た女の歌の中に、自分の名前を認める。次に母親は息子を認め、その名前を叫ぶ。

鷗外は何度も匿名、または「微行」の魅力と価値を称えたが、一つの例として、『伊沢蘭軒』における、蘭軒などの「晦れたる」人と山陽などの「顕れたる」人の対立に触れておきたい。鷗外はビスマルク（鉄血宰相）と蘭軒を比べ、双方とも宴席が嫌いであったと指摘しながら、次のように続ける。

人は或は此言を聞いて、比擬の当らざるを嗤ふであらう。しかし新邦の興隆を謀るのも人間の一事業である。古典の保存を謀るのも亦人間の一事業である。ホオヘンツオルレルン家の名相に同情するも、阿部家の躰儒に同情するも、固よりわたくしの自由である。(XVII, 171)

重要なことは、無論、「名相」と「躰儒」、「名」と「躰」なのである。

(3) 名前を操作する人物

名前に対する態度を「名聞」なのか「微行」なのかという、絶対的二者択一に還元してしまうことはできない。例えば、権力者は、人々が名前の権威を尊重するということを老獪に利用し、政権を確立することもある。『佐橋甚五郎』に登場する家康の悪夢はその証である。「徳川家康」という人間が松平家に生まれ、三河の守になり、新田つまり源を先祖として主張できるように、まさに徳川と名告り、偽系図をつくらせたのは、周知のことである。『佐橋甚五郎』は「大御所」になった家康の悪夢を描く。慶長十二年、朝鮮から来た使いは家康に謁見した。その朝鮮人を見送ってから、家康はすぐに「喬キョウ僉セン知チ」と言われる人を問題にする。

「誰も覚えてはをらぬか。わしは六十六になるが、まだめつたに目くらがしは食わぬ。あれは天正十一年に浜松を逐電した時二十三歳であつたから、今年は四十七になつてをる。太い奴、好うも朝鮮人になりすましをつた。あれは佐橋甚五郎ぢやぞ。」(XI, 510)

家康の反応は単なる疑いではなく、幻、または悪夢に近いのである。彼にとって、「喬兪知」というのは偽名、または仮面にすぎない。その仮面の裏に彼は「佐橋甚五郎」という、彼を苦しめる過去の亡霊を見ているのである。数年前に、家康と佐橋甚五郎の間に摩擦が起きてから、甚五郎は逃げ、行方が知れなくなっていたが、ここで強調しておかなければならないのは、甚五郎が「当時三河守と名告つた家康」(XI, 512)の行為をよく知っている人なのである。「当時」とは家康が将軍になる前の時期という意味である。その当時、「三河守」は強固な権力基盤を持たず、敵から擲揄されたものであった。「三河の水の勢も／小山が堰けばつい折れる。／凄まじいのは音ばかり。」(XI, 515)という歌はその例である。そうすると、この小説の魅力は佐橋甚五郎と家康の相互の視線にある。もし喬兪知が本当に佐橋甚五郎であれば、彼は、今立派な「大御所」になった家康が、昔敵を殺させた「三河守」である、と言えるはずだ。他方、新しい政権を樹立した家康は確かに政権確立の曖昧な時期を忘れさせようとするが、彼自身は過去の亡霊に襲われている。家康は、喬兪知をみた時、この人は佐橋甚五郎に違いないと反応し、そうすることによって、自らの名前への態度を漏らしてしまう。つまり彼にとって、名前は単なる手段にすぎないのである。そういう面では、『佐橋甚五郎』は『阿部一族』と『興津弥五右衛門』という、名前の権威を尊重する武士の話などに光を当てる。言い換えれば、名前を重んじる家臣の態度というのは、家康などにとって、政権を確立する手段に過ぎない。

(4) 名前の多様性を楽しむ人物

史伝で鷗外は、江戸時代の名前の豊かさに夢中になる。例えば、『細木香以』で、作家は大喜びで、子之助、藤次郎、二代目津籬、晋、香以散人、鯉角、李隻、梅の本、香以、好以、交以、孝以、何廼屋、梅阿彌という主人公の名前を数え上げる(XVIII, 79)。細木香以は阿彌号を買ったり売ったりするにさえ至る。鷗外はこの名前の豊かさを人間の多面性とつなげている。この点では、渋江抽斎という人物は典型的である。また、鷗外は好んで号の多義を重視する。

例えば、抽斎の友人真志屋五郎作の戒名の場合がある。

剃髪して五郎作新發智東陽院寿阿弥陀仏曇齋と称した。曇齋とは好劇家たる五郎作が、音の似通つた劇場の緞帳と、入宋僧喬然の名などを配合して作つた戲号ではなからうか。(XVI, 305)

号には「戲号」を含むゆとりさえもある。この視点から見れば、名前は柔軟な網である。余白のあるものである。

(5) 名前を求める人

『護持院原の敵討』は単なる仇討ち物ではなく、名前を求める冒険に他ならない。小説の主人公たちは、山本三右衛門を殺した犯人を探しに行く。しかしこの追跡は何よりもまず名前を捕まえる追跡なのである。つまり、父三右衛門の子供たち、宇平とりよ、それに第九郎右衛門はこの犯人の容貌も生国も本名も知らず、そのごくありふれた、しかも疑わしい通称「亀蔵」しか知らないわけである。幸いに文吉という仲間が、「敵の見知り」として彼らについてゆく。それからこの三人の男は幾月も日本全国を歩き回りながら、この亀蔵を探す。三人は噂を聞いて、何度も「あれが亀蔵だ」と想像するが、結局は人違いだったのだ。宇平が公式の敵討ちをやめた後、九郎右衛門は江戸から手紙をもらう。そこで、桜井という親戚が浅草で聞いた話を語っている。ある男が友人にこう言った。

「ゆうべの事だつた。(略) 奴がある。見れば、あの酒井様にゐた亀ぢやあねえか。己はびつくりしたよ。好くづうづうしく帰つて来やがつたと思ひながら、おい、亀と声を掛けたのだ。すると、えと云つて振り向いたが、人違えをしなさんな、おいらあ虎と云ふもんだ。」と (XIV, 301)

それから九郎右衛門と文吉は江戸に戻り、文吉が敵を見つけ、彼を捕まえた後、九郎右衛門はこの容疑者の「国所と名前」を問う。犯人は「そりやあ人違えだ。おいらあ泉州産で、虎蔵と云ふものだ」(XIV, 433) と答えるが、文吉に身元を確認され、観念する。そして犯人は犠牲者の娘りよに斬られる前に、もう一度自分の名前を言う。「わたしは泉州生田郡上野原村の吉兵衛と云ふものの倅

で、名は虎蔵と云ひます」(XIV, 435)と。これは非常に皮肉な設定である。「虎蔵」は犯人の本名であり、「亀蔵」はその偽名であるが、「亀蔵」として世間に知られていたのも、本人は本名「虎蔵」を仮面として利用している。そうすると、虎蔵だ、と名告ることは、時によって嘘でもあり、本当でもある。これを読んで、本当の意味での「本名」とは何か、と考えさせられる。結局、空虚な偽名を求めて日本をさまよう追跡者にせよ、本名を仮面とする逃亡者にせよ、いずれも名前を追い求める人である。仇討ちをするということは、空虚な名前から実在の犯人までにたどりつくことであり、他方、犯人にとっては、偽名から本名に戻るといふことなのである。

さて、今まで見てきた主人公の、名前に対する様々な態度が示すように、鷗外が「名前」に魅惑されていたということは確実なことである。しかし、鷗外が、名前を大切にする人に対して一種の共感を示すにもかかわらず、これらの作品には、時として辛辣な揶揄が秘められていることも見逃してはならない。この諧謔はとりわけ『寒山拾得』に、明瞭にうかがえる。唐時代の官僚閻リョウは「えらい人」と会おうとし、拾得は普賢で、寒山は文殊だと信じ、天台国清寺に行き、食器を洗っている拾得と、残った飯を食べている寒山の方へ進む。そして、

袖を搔き合せて恭しく札をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございます」と名告つた。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合せて腹の底から籠み上げて来るやうな笑声を出したかと思ふと、一しよに立ち上がつて厨を駈け出して逃げた。(XVI, 250)

二人の僧を笑わせたのは、やはり閻の仰々しい名告り方である。この閻は「名前は単なる印である」という態度をとらず、「名前は実なり」と考える者に他ならない。それに対して、鷗外の書いた『寒山拾得縁起』がある。これは解釈しにくい文章なのであるが、自分が「メツシアスだ」と唱える宮崎虎之助の挿

話と、「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」(XVI, 253)という、鷗外の自分の子供への話は、いずれも、名前に関して一種の懐疑を含んでいる。『寒山拾得』の大笑いを念頭に、『阿部一族』の冒頭へ戻ってみよう。「従四位下左近衛少将兼越中守細川忠利は」(XI, 311)というのである。語り手が主人公をフルネームで名指したのは偶然ではない。大名には長い名前があるとは今更指摘するまでもないが、しかし鷗外は武士の文化における名前の重みを分析するばかりではなく、それをからかうこともある。熊本にいる忠利は、病に罹り、江戸へ飛脚をおくる。將軍は身分の高い人に「連名の沙汰書」を作らせ、「三人の署名」をした手紙を送らせる。しかし当時の郵便事情で、この手紙は忠利が死んだ後江戸を出た。名前には象徴の力があっても、このばあい全く役に立たない。そうすることによって鷗外は、名前の力を相対化しているのではないか。

第二章 文学的な手段としての人名

名前は、登場人物ばかりではなく、作家、或いは語り手にも関わっている問題である。それ故に、これからは表現形式の方に焦点を移そうと思う。

(1) 史伝と歴史小説の差異

『渋江抽斎』の構造を考えると、「わたくし」という語り手の墓地の調査と資料収集も名前を求める冒険なのだ。作品は、「弘前医官渋江氏蔵書記」(XVI, 262)を記した渋江道純と、「抽斎云」(XVI, 264)と私的に署名した抽斎とが、同一人物なのかどうか、という謎を解こうとするわけである。つまり史伝においては、名前を操作するのは、専ら語り手である。『伊沢蘭軒』では、語り手が名前を追い求めるといことが作品の基調をなし、それは未知な名前を発掘する楽しみにまで至る。「その一」の終わりで語り手は「古手紙の事を語つた」後、「これは蘭軒の名が一時いかに深く埋没せられてゐたかを示さむがためである」(XVIII, 4)と付け加える。こういうところに史伝と歴史小説の本質的な差異が明瞭に現れており、それは人物の取り扱いにかかっている。

つまり、小説の人物は自分の名前と同時に登場する。言い換えれば小説の場合、小説家は人名を述べることによって人物を存在させる。それに対して、史伝の主人公は最初ヌケガラのような名前にすぎない。「蘭軒」や「霞亭」などは、作品が始まる時、人物ではなく、名残に過ぎない。人物の名しか残っていないのである。それらの人物が「何人であったか」は不明である。作品の筋道はこれらの名前を発掘し、それに肉付けし、命を吹き込む、つまり、名残を抛り所にして、徐々に人物に輪郭を与えていくという過程なのである。史伝の読みづらさと魅力は、人と名の間における元々のズレに基づいている。史伝を読むにつれて、このズレは次第に埋まつていくが、史伝の人物は、小説と違い、決して最初から存在しているのではなく、逆にある探究の対象なのである。

(2) 人名の仕組み（系図、星座など）

人名の取り扱いによって歴史小説と史伝というジャンルをはっきり区別できるが、別の視点でも人名は鷗外の歴史文学の美学に影響を与えている。『渋江抽斎』の愛読者松木明は、作品を読んで、「まず最初に気が付くことは、その登場人物の夥しいことである。」（『渋江抽斎人名誌』、津軽書房刊、昭和56年）と書く。彼は人物を網羅的に拾い出し、八百有余名を列記した。この「夥しい」人名の数は文学的にはどのような意味を持っているのだろうか。小説の読者は、二次的な人物に束の間関心を寄せても、専らごく限られた人数の人物に注意を集中する。したがって、『渋江抽斎』などの大史伝を読む時、人名誌や系図、人間関係の星座図を作らざるをえなくなる。史伝は小説に慣れた読者をその人物の多さで狼狽させるわけである。

実際には、系図と人名の星座（鷗外の言葉でいうと「学問芸術界の列宿」）自体は、これらの作品の構造に直接大きな影響を与えている。史伝は、縦（通時的）と横（共時的）の両方向に発展する。しかしこの発展は根本的に人名から人名への発展なのである。例えば『伊沢蘭軒』のライトモチーフは、語り手が古い書簡を引用し、この「尺牘には種々の人の名が見えてゐる」（XVII, 128）と語った後に、これらの人物の略伝を作ることにある。

もう一つの面白い現象は名前の列挙なのである。こうしたリストは、大史伝だけでなく、『堺事件』などにも出てくるが、人名自体の重要性をあまり意識しない読者にとっては、こうしたリストは無味乾燥なくだりと思われるだろう。しかし鷗外が、忘れられた人名を列記する時、読者はそれを無駄な考証として軽んじるのではなく、その中に、作家がいかにか名前の重みを大切にしているかという事実を認めなければならない。

(3) 技 法

人名はしばしば修辞の技法と関連して意味を齎す。ここでは固有名詞の意味づけ、題名の重要性、脱線の役割などといったことを省略しなければならないが、暫く伏線と繰り延べに留意したいと思う。

興津弥五右衛門は、遺書を書いている途中で、自分が大人になってから興の字を忠興三斎公より受けた、というエピソードを語るが、にもかかわらず遺書の冒頭に彼は次のように書いている。「某祖父は興津右兵衛景通と申候」(X, 573)と。これは正しくない。祖父は沖津である。読み返してみると、読者はこの伏線の微妙さが味わえるようになる。興津弥五右衛門は君主にもらった字を子孫だけに伝えるのではなく、先祖にも与えるわけである。こういうふうには、過去に遡る字付けは、家名の重みを示すもう一つの証である。

一方、前に小説の人物は自分の名前と同時に登場すると述べたが、実際には人物が自分の名前に先立って登場することもある。(それは無論史伝の場合に想像できない仕組みなのだが。)人物の名前の繰り延べの代表作は『ぢいさんばあさん』である。短い作品とはいえ、その三分の一までに二人の主人公はただ「爺さん」と「婆さん」で呼ばれている。一見逆説的なことだが、これらの無名人は噂の種になる。噂は広がったり、消えたりするが、「婆さん」が将軍家から銀十枚を頂いたという話が世間に知られるようになると、「翁媪二人は、一時、江戸に名高くなつた」(XVI, 135)。その折から、語り手は両方の名前をあげる。爺さんは美濃部伊織であり、婆さんはその妻である。それからフラッシュバックがあり、伊織とるんの以前の話が語られていく。この繰り延

べの役割は明らかに「ぢいさんばあさん」の静かな生活と「美濃部伊織とるん」の波乱に富んだ生涯を対照させることに他ならない。こうした設定も「微行」つまり無名の魅力を雄弁に語っているのだ。

(4) 人物の名指し

名告る、署名する、または名前を呼ぶ、といった行為は決して取るに足りない行為ではない。鷗外の登場人物は人の呼び方に敏感である。その好例は『高瀬舟』である。同心羽田庄兵衛は護送する罪人をまず「喜助」と呼びかけるが、彼の話聞いてから、無意識に「喜助さん」と呼ぶ。

今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て称呼を改めたわけではない。其声が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衛は此称呼の不穏当なのに気が附いたが、今さら既に出た詞を取り返すことも出来なかつた。

「はい」と答へた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそろおそろ庄兵衛の気色を覗つた。(XVI, 230)

日本語、日本の社会では相手をいかに呼びかけるかというのは、決して些細なことではない。したがって、語り手自身が登場人物をいかに名指すかというのも、決して小さな問題ではないと考えられる。

歴史文学の作家は、江戸時代の日本人がいくつもの名前を持ったという事実におつかる。普通、それらの名前の中で一つの名称を選択しなければならないのである。しかし、鷗外の作品の場合、これは恣意的な選択ではない。例えば『安井夫人』では儒者安井息軒とその妻お佐代が登場するが、小説の中でそれぞれいくつかの名前で呼ばれている。後代に「息軒」という号を残した、実在した人物は、小説の冒頭から仲平という字で登場する。これは作家の気まぐれの結果であろうか。いや、むしろたまたまそう呼んだわけではなく、熟考の上で行った選択だと思われる。鷗外はこの人物を名指す度に、例外なくこの字(通称の役割を果たしている字)を使いながら、仲平の他の名にも読者の注意を引く。若い仲平は、醜男なので、世間から「猿」という渾名を付けられた。昌平黌に入学した後も、仲平はたえず友達からからかわれ、「今は音を忍が岡

の時鳥いつか雲井のよそに名告らむ」(XV, 549)という和歌を詠む。月日が経って、仲平の学殖は世間に認められるようになったが、擲揄は止まなかった。それでも粘り強い仲平は出世し、「大儒息軒先生として天下に名を知られる」ようになる(XV, 562)。こうした過程は、作品の意味に光を当てる。仲平は軽蔑的な渾名に反抗し、有名になるまで自分の道を辿った。作家は「大儒息軒先生」になった「猿」の出世を確かに無視はしないが、結局作品の焦点を別の所に置いたのではないか。言い換えれば、鷗外は、作品全体を通じて「猿」でもなく、「息軒先生」でもなく、「仲平」という名前を使うことによって、押しつけられた擲揄と、賞賛のイメージとを拒む。「仲平」とは軽蔑的でもなく、仰々しくもない呼称なのである。つまり、この小説では、人物をその字で名指すということは、平凡な人間を親しく描くという意味を持っている。それに対して、『渋江抽斎』では鷗外は同じ人物を登場させる時、彼をその号「息軒」で呼ぶ(XVI, 385)。この場合はまさに、安井夫人の夫ではなく、『弁妄』の作家にしか興味を持たないからである。結局、鷗外が若山甲蔵の『安井息軒先生』を資料としながらも、敢えて『安井夫人』を書いたのは、お佐代さんの存在を強調するばかりではなく、息軒というあまりにも堅苦しいイメージを正そうとしたからであろう。

夫と同じように、お佐代さんは、三通りの呼び名で呼ばれている。題名で「安井夫人」と言われている人は、結婚する前に、美人なので、「岡の小町」という渾名を付けられ、それ以外の場所ではずっと「お佐代さん」として登場するわけである。そうすると、私は大儒息軒先生＝安井夫人、仲平＝お佐代さん、猿＝岡の小町という対応に留意せざるをえない。「岡の小町」から「安井夫人」までという過程は仲平の生涯の成り行きと類似点もあるが、ズレも少なくない。まず、仲平よりも、お佐代さんという呼び方の方が語り手の敬愛を表している。また、安井夫人という言い方自体は難しい問題を提起する。すなわち「安井夫人」の「夫人」がいかなるニュアンスを持っているのかということである。確かに敬称ではあっても、何か皮肉めいた表現なのではないかという気がする。

いずれにせよ、語り手が人物をいかに名指すかという問題は多くの作品にあてはまる。例えば『大塩平八郎』では、鷗外は主人公が哲学者であるという側面を無視するから、その号「中齋」も用いない。それに対して『渋江抽齋』では鷗外は抽齋という雅号を優先する。その理由は明白である。そもそもの出会いはまさに「抽齋」との出会いであったし、「抽齋」とは主人公が「古武鑑や古江戸図をも蒐集」した折の雅号だからである。そして、『渋江抽齋』の成善が保になるというふうに（XVI, 458）、作家が人物の呼び名をかえる場合も忘れてはならないが、渋江保のケースは『渋江抽齋』を特徴付ける「総ての名称の震動」の枠組みに置き直さなければならないと思われる。

鷗外の歴史文学における人名という問題に注意を引くために、今日の発表の対象を幾つかの典型的な例に絞るつもりだったが、扱対象がやや広すぎたので（注②）、話は雑然としたかもしれない。しかし、鷗外文学全体におけるこの人と名という問題は同時代の世界文学におけるアイデンティティの問題とも深く関わっている。プルーストやカフカなども、他の文脈で人名という問題にぶつかっているのだ。鷗外の歴史文学は、個人と名前（或いは主体と姓名）が円滑に対応しているという近代的な幻想を打ち砕く。たとえ作家が過去の「人名仕組み」を懐かしむにしても、それは単なる懐古ではなく、むしろ多方面にわたる人と名前についての演奏なのである。匿名と名誉、つまり「微行」と「名聞」という二つの誘惑の間をたえずさまよいながら。

*この人と名の話が生まれるきっかけとなった「場」を作って下さった、早稲田大学教授竹盛天雄氏に心から感謝いたします。なお、拙い原文の誤りを正してくれた、立教大学仏文博士課程の内藤元和君、ありがとう。

注

- ①：引用は『鷗外全集』（岩波書店刊、昭和四十六年）からである。ローマ数字は巻数を示す。アラビア数字は頁数を表す。
- ②：手短にでも触れられなかった研究の方針を図式的に示したい。まず、人名の翻訳という難しい問題。次に、署名から子供の命名まで、明治五年のいわゆる「壬申戸籍」を含めて、鷗外の伝記上で人名が喚起している問題。また、一番最初の明治十年の『河津金線君に質す』から最晩年の『帝諡考』まで、鷗外の作品全体における人と名のつながり。

討議要旨

小西甚一氏から、発表を高く評価された上で、中国古典文学における、名と実の一致、不一致に対する関心が指摘され、鷗外への影響が示唆された。また芳賀徹氏から、鷗外の「名」の問題は、東アジアの伝統と世界文学におけるアイデンティティの問題、いずれに親近性をもつのかとの質問があり、発表者は後者を重視したい旨の回答をされた。